



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第 14 主日 B 年 (2024 年 7 月 7 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エゼキエル書 2 章 2—5 節

第二朗読：コリントの信徒への手紙二 12 章 7b—10 節

福音朗読：マルコによる福音書 6 章 1—6 節

この人は誰？ 起源への問いかけ

三つの朗読から

第一朗読の冒頭、「霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた」（エゼ 2 章 2 節）は印象的です。人は自分の力で立っているかのように錯覚しますが、実は神さまがわたしを立ち上がらせてくださっている。神さまの力で立っていることに注意したいです。神さまがわたしを立ててくださったのは、ある使命を果たすためです。エゼキエルがそうであったように、わたしたち一人ひとりにも使命が与えられています。それは「反逆の民」のもとへと遣わされるような、けっこうしんどい、つらい使命かもしれません。

第二朗読では「わたしの恵みはあなたに十分である」（2 コリ 12 章 9 節）という主の言葉に注目しましょう。弱さ、苦しさ、悩み、欠乏、貧困に直面すると、わたしたちは神さまからの恵みがないかのように思ってしまう。しかし、わたしの弱さの中にこそ恵みは輝くのでしょうか。それは十字架のイエスさまとひとつに、弱さの点でひとつになることです。

福音朗読にあるイエスさまの言葉「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」（マコ 6 章 4 節）はここに留めておきたい一言です。もしかしたら、人が一番孤独に陥りやすい場所は家族の中かもしれません。周りの親しい人が自分のことをわかってくれなかったら、どんなにかつらいでしょう。故郷で受け入れてもらえないイエスさまには哀しみがありません。

説教：この人は誰？ 起源への問いかけ

3 節の「この人は、大工ではないか」に注目してください。イエスさまの教えが「どこから」来て、イエスさまの教えは「何か」をまじめに問うとは、イエスさまの起源とイエスさまの本質を問うことに

なります。つまり、イエスさまが誰なのかを問うことです。先々週の福音の言葉「いったい、この方はどなたなのだろう」（4章41節）の問いかけが、ここでも響いています。しかし、人々はイエスさまが誰なのかを、イエスさまの語ることばから理解しようとはせずに、自分たちの知識に頼って理解します。「つまりく」はスカンダリゾー（この言葉を語源にスキャンダルという英語が誕生しました）ですが、「罨」という意味のスカンダロンから派生した動詞です。このことばは「罪に落とす、不信仰へと転落させる」という意味がありますし、さらには「怒らせる、いらだたせる」という意味にも発展します。イエスさまを自分たちの常識で割り切ろうとする人々のかたくなさや、思い込みが、つまりきの「罨」へと彼らを陥れてしまったのです。

ナザレの人々は、イエスさまにつまりきます。なぜなら、イエスさまが語ることばに耳を傾けず、自分たちの理解の範囲内でイエスさまを見ようとしたからです。

わたしたちが得ている知識とか理解とかは、ほんのささいなものです。体験もわずかなものです。でも、知識と理解と体験が、新しいものと出会ったときに、それを受け入れるための基準となります。つまり、わたしたちはどこまでいっても自分の尺度だけで、新しいものを、新しい人を見ようとするのです。それは自分の絶対化です。

言葉は、わたしたちを新しくしてくれます。第一朗読のように言葉は霊のごとく、その人の中に入ってくるのです。そして、その人を内側から新しくし、立ち上がらせてくれます。そして、言葉は、その人を新しい世界へと遣わしてくれます。

ナザレの人々は、イエスさまの言葉に驚きました。「どこから」、「何か」と疑問が生じてきました。イエスさまに近づくチャンスでした。しかし、自分たちからイエスさまから離れていきます。イエスさまが「人々の不信仰に驚かれた」とは、言葉を信じないことへの驚きだったのです。その点で、第一朗読の反逆の民とナザレの人々は一緒です。

もし、第二朗読のパウロのように、ナザレの人々が自分の弱さを知っていたら、イエスさまの教える言葉はきっと心に響いていたはずです。

お知らせ

日時：7月14日 ミサ後

場所：アントニオ会館

皆さま、できるだけ参加してください。